

科学図書館叢書

東遊草

三浦梅園著



科学図書館



東  
遊  
草

三  
浦  
梅  
園



## 目次

二月十一日	富永より高田迄	五里	.....	五		
十二日	高田より大貞に出中津迄	八里	.....	五		
十三日	中津よりはね木	六里半	.....	六		
十四日	小倉迄	五里半	海上	三里	.....	七
十五日	関より船木迄	九里	.....	八		
十六日	船木より周防山口まで	八里	.....	一一		
十七日	山口より宮市へ五十町道	四里	富市より富海迄	二里	.....	一一
十八日	富海より呼坂まで	九里半	.....	一四		
十九日	呼坂より岩国をへ小方迄	九里	.....	一五		
二十日	.....	.....	.....	一七		
二十一日	小方より厳島へ	三里	厳島より広島へ	五里	.....	一七
二十二日	広島より田万里 <sup>タマリ</sup> へ	拾里	.....	一八		
二十三日	田万里より尾道迄	九里四十八町	.....	一九		
二十四日	.....	.....	.....	二〇		

3 目 次

二十五日	.....	三
二十六日	此間 海上 十五里	三
二十七日	下津井より岡山迄 九里八町	三
二十八日	おか山より三石迄 九里	二四
二十九日	三石より書写の麓迄 十里 書写のぼり十八町 下り 同	二五
三十日	東坂本より幾路迄 五捨町 姫路より賀古川迄 四里 賀古川より大久保迄	二七
	五拾町道 四里	二七
三月朔日	大くぼより茨木住吉 九里	二八
三月二日	住吉より尼崎へ 六里 尼崎より大阪へ 三里河舟	二〇
三日	.....	三
四日	大坂よりならへ 八里	三
五日	奈良見物所 六十四丁 ならより大野迄 十里	四
六日	大野より二本木迄 十一里	七
七日	二本木よりおはた迄 九里	六
八日	おはたより 外宮 壺里 処見物 五拾町道 七里のよし 七里はなかるべし	九
九日	伊勢山田より松坂まで 五里	四

十日	松坂より坂下迄	拾壹里半	……………	四				
十一日	坂下より草津迄	拾壹里半	……………	四				
十二日	草津より瀬田迄	壹里半	せたより石山寺	拾八町	石山より大津迄舟	二里	……………	四
	大津より坂下迄	貳里	坂下より比叡	上五十丁	修覚寺より京三條迄	壹里半	……………	四
	合捨里半	……………	……………	……………	……………	……………	……………	四
十三日	五里半ばかり	……………	……………	……………	……………	……………	……………	四
十四日	京よりふしみ迄左之通にて	五里ばかり	伏見より大坂迄	川舟十里	……………	……………	……………	四
十五日	……………	……………	……………	……………	……………	……………	……………	四
十六日	路程三里ばかり	……………	……………	……………	……………	……………	……………	五
十七日	……………	……………	……………	……………	……………	……………	……………	五
十八日	……………	……………	……………	……………	……………	……………	……………	五
十九日	讚州丸龜より金比羅往来	六里	……………	……………	……………	……………	……………	五
二十日	……………	……………	……………	……………	……………	……………	……………	五
二十一日	……………	……………	……………	……………	……………	……………	……………	五
二十二日	……………	……………	……………	……………	……………	……………	……………	五
二十三日	今在家より	富永	三里半	……………	……………	……………	……………	五

ことし寛延三年庚午はからずも東遊の興を催して睦月もやや過ぬ如月十一日佳辰なれば迎旅装しぬ

二月十一日 富永より高田迄 五里

此日天晴風朗なり貞右衛門といへる男をともしなひてうかれ出ぬ吾里なりけるほとりの山迄人見をくり夫よりぞ雲よ霞と立わかれぬ其夜は高田に因の銅野貞右衛門といふ人の許に宿しそのほとり兩徳屋龜右衛門丸屋五兵衛などいへる人人打あつまり四方山の物語などしてやや五更になんなんとして枕につく

十二日 高田より大貞に出中津迄 八里

あした九屋のあるじ朝餉たべよとて招きければ遠路ながらいなみがたくて日はやや四なるべしわらじの紐結びぬ折から故郷の甥専助家のいひのこしけるとて文などつたへて是は外に友あり彦の祭に詣つ逢事も有べけれど是もはかり難ければ恙なく帰国の面をなどいひて別れけり銅氏が別をおしみて明壽教寺のうしろなわてを西にをくりける爰は肥州島原の旧領地なりしが去年島原侯不禄し給ひ嗣君宇津宮戸田能州と所がへありけふ関東の諸士匹馬に策をくわ



へて通られけるにあふ是より宇佐にまふでいと口原の古蹟をながめ新左衛門仏は日本の仏なるべし橋坊主にやすらひ大貞一の宮を拝し御池の波に五湖をしじめ曾遊も指ををればみとせのあとの月の頃なりしに光陰うつろひやすく常盤の松も緑ふかく尚古郷より伴ひける彦詣の客なども一盃の美味をかたづけ行行ひとつまちは過ぬ牛かみ村忠左衛門といふを主としける

十三日 中津よりはね木 六里半

日すでに出ければ友どち中津の町へ出ける売酒廢墟にやすみ寺町を見甥などもおなじく来りてけるを引連爰かしこ知音などとひてはりまやのあるじを尋れば酒よ肴ともてなしひとり男をそへて天仲寺へ案内をしける高瀬川に棹したが為におるはたものの如水の女の廟を過天中寺へ詣ける是は先代小笠原侯の廟ながら勲業一旦ちりとなる香炉などは側ちて霧常住の烟をたき燈籠苔むして月五更のひかりをかかぐる歟花鳥はそれとなう客をよび人に嬌て時をうつすを忘れけり扉を開て内を拝し山を下りて案内の男に辞し彦の高根にこころざす人人も同じく此路にして手をわかち小犬丸の西に出なを向といへるに中津小倉の分界塚子を立たり、くつ川、はちや、しやうゑ、湊椎田をへて新田原といへる松原にかかりぬ其長さ壺里ばかりかへりみおもふにむかし西遊せし頃生の松原いきて見し事などおもひ出しあわれそのかみ宮古びとのへし跡にもあらば今少しやさしき名も有べきにと独嘆じてめてのかたの山をとへばの

ぞき山と云日ははね木村の西のかたに落しかば直にこの村の仁右衛門と云男に宿かりけり

十四日 小倉迄 五里半 海上 三里

家の老尼に朝餉はやくしたためよとたのみければしのめにはたちぬ春ながら尚霜もふかく  
鶴の橋にはあらでおはしの宿も行過ぬ沖のかたを望めば雨も久しくたへぬればみの島山も甲  
斐なくてよぼるの松原に暫くやすらひ狸山の路にも迷はず名は何とやいふ一里もやや違き土  
手をへて海の面の馬島や、かぶとましまなど云める青螺をかぞへ松原をすこしめぐり足立山の  
ふもとに一の蘭若あり雨をかくせる龍鱗琴を奏る風の音峰よりつゞく松にして門に第一関の  
字を懸だしたり先なる門には即非の墨蹟として広壽名山福壽禪寺とあり内には不二門の三字  
を榜せり水殿雲房みめぐりて本堂の後に一の苔の径あり掃除する僧にとへば此上は御廟所の  
み見るべき所なしといふされど木しげく苔濃にしておもしろう覚ければ労を忘れやや暫くの  
ぼりけるに小き精舎などもみえ廟前石の鳥居を立たり静かにここを下り小倉の町に出船長の  
いぶせく呼るも力にて小きわたし船にのりぬ是は城門の前の江にして所の名さへ橋下とて衣  
冠の土橋のうへに履をならし我ごとき旅客は船にのりぬ櫓うごき岸転じて壺丁ばかり番所あ  
りここにて往来改ける長崎の順礼大阪の商人筑前の遊僧豊後の道者薬うりとおぼしきおのこ  
はたんすをかたへに大事と形付虚無僧は天蓋ふかく引かづきて物も得いはず僧有老あり女あ

りあるは舷をたたきあるは掌をうつて今様をうたひけり船子をすかして名所のかたとへば名所灸壺かたりきかせんと戯てゆけば右の浜を長浜とをしへける是よりや天の河原につづくらん星かとみゆる企救の高浜とは是なり清経の世をうき事におもひ月おもしろうすみけるに夜ふけてひとりふなばたに出、腰よりようてうぬき出し数曲を吹て身を投じ柳の浦は波あれて大里は白かべの墟などみえたりこれつくしの諸侯船にのるの所なり九重の内恋しくば柳の御所を立よりてとよみしは爰かたとへども答へず藤松の山は花挿頭山カサザンに連れり大閤秀吉の鷓舟已に覆らんとせし與次兵衛瀨は石くろくして與次兵衛が塔のみうへに白くたてりめかりの宮豊にあるを今はやともの神といひて前にふたおひの島あり戦国の餘習尚盛なりしとき佐々木がんだりう宮本武蔵と劔を論じてうたれたるがんだりう島の右を過田の首島はその名の拙きには似ずおもしろく興じてとかくする内関につきぬ城シヤウのこしさかひや五兵衛といふ人を尋て故郷への文などたのみ赤馬町いとや喜兵衛といふ旅やに杖をやすめけりいなり町の躍にばかされ渡部橋供養といへる狂言見て家にかへればあるじ已に枕につかんといへるここは西国第一の湊にして幾船にか天涯万里の愁をのせていかりを波にしづむらん町二里になんくとして所の繁昌大かたならず

十五日 関より船木迄 九里

夜をこめて立けるに長崎より山口にかへる客を伴ひける夜も深かりければ阿弥陀寺のとざし  
もいまだ開ざればそのままに打過ぬこの頃長府のさる禅院日向の古月和尚を請じ説法あるの  
よしにて関よりこなた男女打つどひ参りける潮壇の浦に漲て壽永の戦鼓の音に似たり山陽西  
海の山相對してそびえその間甚ちかしかなたのかたはやとも神のいます所豊の尤長門にせ  
まる処にして餘所目にはその間七八町ばかりとも見へし盛衰記にあるさふらひ泳ひで筑紫へ  
わたりしとはこの所にあらずや龜山の神をとへば跡になしぬはやともかめ山はいはゆるいに  
しへのめかりの神なりめかりの神は彦火火出見命といひ或は火蘭降神命ともいふひとりの老  
人はも古月の説法きかんとて行けるにともなひ左にたかき山をみて過けるにその山をとへば  
むかしこの山檜木多く中頃火出自焼たりよつてひの山と号すいにしへこたん中将この山に城  
をきづくどぞかたりけるこたん中将なる人を道行人にとへばいろくの物語しけれども齊東  
の野語にしてしるしとするにたるものなし一たび山陽の地に入れば山ことくく兀て童なり  
住吉の神は山のうしろを拝し長府の町に出この沖満珠干珠の二島有て神功皇后のあとをとど  
むくらまの里はくらからで吉田川をのぼるとて毛利讃州の士にあふ此川に漁するをとへば白  
魚とるよし是より互の口ほころびとりくの雑談して最前のおのこのいひけるこたん中将と  
いふをとへばこの国の故老かたりつたへたるのみにしてその正説をしらず琳章太子いまだ帰  
化せざるむかしの事ならんひの山その古城なり後毛利幕下の臣内藤何がし再たびこの地に城

をきづくなどかたる内吉田の駅に入しかばかれは北吾はひがしと立わかれひとつの坂にのぞむ山はげて沙白く宛雪中の山をみるがごとし岫に陟て父母を瞻望する古き詩もおもひ出られそこはかとなく攀のぼるに隠玄の流を汲る僧かと覺しき山を下るにあひ坂の名をとへば蓮台坂といふ上に蓮台寺ありといふ山は八分なるべし左に道あり白峰山台寺といふ勞れければ詣らず山めぐり道転じのぼる事違く下る事ふかし麓なるひとつの家に立より邯鄲の旅店にはあらねど黄梁一睡の夢をむすび友人に驚され立けるにいかにしけん左の足をいたためける此路すがら宇津宮の諸士馱馬にまたがり駕籠につかれ見もせぬかたと故郷と志し通るものすくなからず定て恩愛のわかれをさきすみふりしかたも恋しかるべし厚狭川はわたし守の船にゆられて船木の町に宿かるにきのふ関のわたしを船を同してわたりけふもあとやさきと道ふみし府内の道者さきに宿かりけりあるじ客も多ければいかがいへるをさすが同国のよしみありてくるしかるまじといふにさらばともかくも逆表ににじりあがりぬあるじは櫛屋甚兵衛櫛を以て生業とす風呂屋を尋ていためる足などあたため宿の嫡子新千代といふに山中までの馬たのみ貞右衛門とひとつ床に屈りふしぬこのわたりは吾国とはちがひはにふの小屋は畳なくわらむしろのいとおそろしきにふるき琉球むしろ一枚しきたりゆかの簀子はをれて夜きるべき一重もなく二人して夜すがらふるひけり家のあるじのかたりしむかし神功皇后この地にして楠をきり船をつくるよつて船木といふその根地に入て石となるよくもゆとて圍爐裡にたきけり

その臭甚悪し吾つくし豊前筑前にも是を出す

十六日 船木より周防山口まで 八里

豊府の客は我に先だち又めぐりあふべしなどいとま乞しうてぬ駄馬にまだがりける頃は朝もよひの東の空もまた暗くて十五夜の月のかつら西の山端に半みえて流も木木の間にひびきて山中の宿に馬よりおり半道ほどへて峰にのぼり周長の界石の表をみる大なる松ありこれをわりご松といふ此あたり人多く集るの処はそのかたわらに大なる石の地藏を安じ下に三界万靈の字をかけり是は六道能化の菩薩人道にさまよふものやしふべきにあらず尾郡の町には山口へと志しけるが足のいたみつよくしておもふ程にはかゆかず今朝よりかきくもりて覺束なき空也しが雨しきりにしのをつきておしからぬ衣ながら雨に湿ひ道よりひとりのはかりやを伴ひ山口の町を横にぬけ豎小路なる寡婦の老女の家に入る是より半道ほどと温泉あり

十七日 山口より宮市へ五十町道 四里

宮市より富海迄 二里

11 目次

きのふ夕部の日和には似ず朝日窓にうつろひてければ杖にさそはれ大神宮へと志しける倩地勢を考れば四面山かこみ中間地平なり町もやや長く民のかまども烟たつされど大内家の全盛

をおもへば千分が一なるべし義隆の覇たりしや中国を掌に握り中原を睨めし南面してくひきをあらそふもの換り星うつりむかしの衣冠さりつきて鶯花にあそび鳥林に村がるのみ誠や石火のひかりの内の身は蝸牛の角の上にあらそふにて如露亦如電の觀をなす石垣のうへに竹の森あり松などみえたり爰をつき山といふ定て古蹟なるべし是よりかねのてに左へめぐる一の土橋を遇多嘉のみや厳しまの明神あり鳥居を入板はしをわたるこのあたり神につかふる人の家あまたつくりならべて手水場に漱手洗ひ又鳥井をへ自然石の壇をよぢ祇園の社を望猶小き社数数めぐり猶一層をこへて玉垣を隔て内外の二宮をふし拝むみやかはかや葺の何となう殊勝におぼえ繁れる松の下影を斜に下りてじやうゑんじ瑠璃光寺に遊ぶ二蘭若の景ほぼ相似たり松は百年の緑をふくみ杉は千零の雲を摩しゆふべの雨の木ずへにのこりてしたゝる雫池に落幽径の苔滑なり五重の塔波にうごき百八の華鯨かぜに吼ふ高の峰は猶朝霧につつまれて義隆の古城は此峰の松くらう生たる所と教られてもとの宿にかへり朝飯たうべ茶にやすみ初瀬清水石清水八幡大通院へはゆかできのふ伴ひけるはかりや年は若かりしがねもごろなる男にてけふも宮市までは連となるべしとて祇園の旅所を過橋にかかる爰にひとつの石有長さ六七間もや有べし上に七八尺四方の石をすえたりかさね岩と云又鰐石と云むかし鬼女有てかつぎ来ると云誠しさにはあらずとも聞るままに書附けるこゝを過て右のかた陶尾張守晴賢入道全姜が第宅のあととなり大なる沙川をわたり行事しばらく道のほとりに小き社ありその名をとへ

ば終とことふ是より前つじみせに小き鳥井をこしらへうる所甚多しここに又子供集り鳥井か  
うて神に戯れといふ因て神前にのぞめばあけの鳥居十間ばかりの内に六七たて猶小き鳥井は  
かたへに山のごとく積立たり人にとへば神の好む所なりしといふかねて聞つたへし日上山は  
東照宮の御廟ありこの十一日になん萩より能士来りて能ありしよし人にとへば半道ばかりあ  
とになりぬ鳴瀧は馬場長く溪声高く瀧ぎ隻樹陰濃なり第一の門に月光山とあり是を過て洞門  
あり毘盧峰とかけり寺は尚高くかまへて大松前を遮るうしろに流るる瀑布のうへ童一といふ  
天狗すむといへり寺を泰雲と号す半里ばかりへて佐波山の精舎あり寺前の茶店に縁茗を酌盃  
中の物をか□ふ□たをこへをこし鯖川サバを船橋かけて宮市の町に入宮市は周防の府中にして又  
防府と云銭かはん迎ひとつの家に入日影のうつる迄物語しけりあるじの曰さば川もとにしき  
川と名づく俊乗坊重源大仏建立の時東大寺の材木をこの川上の山にとる役夫食につき□□俊  
乗坊きくづをとり鯖の宇を書川に投ずきくづ盡く化して魚となり役夫の飢をすくふ是より錦  
川をあらためて鯖川といふとおもふに郡佐波と号す故に川もさばといへるなるべし俊乗坊は  
じめ渡宋して勤進す金そこばくを得てここにいたる年の登ざるにあうてこの金を盡く散じて  
飢をすくひ又もろこしにいたるもろこし人うたがひ是をとらへて地にうづむ久してほりてみ  
るに死なずよつてはなちかへす是より行事一里ばかり左のかた山にそうて阿弥陀寺あり俊乗  
坊これをひらく東大寺に先だつ事久しされど所の鄙なれば埋木とのみ年月のふりにつもりて



俊乗坊の影よりも猶いにしへの跡をとどむ又このほとりのみや天満宮あり是は菅原公つくし  
 さすらへのとき此湊麻里布の浜へ船をよせ給ふ則是を祭るなりなどこまかにかたりける是を  
 辞してかの男の語りし天神の広まへに暫くぬかづく宮殿たかく市麿を出松緑の枝をたれ樹間  
 の眺望浅からず石壇幅ひろく石灯籠左右につらなる鳥井にあかがねの額かけたるが年へて今  
 はみどりにみえ金字に天満宮と書るは鮮にできたり町に冢あり是去去年朝鮮人に供するの餘  
 なり国分寺の門よりあみたじのかたを望みうけのの宿に足もとどめずうけの坂をこへすへ田  
 といふを過是全姜が戮につきし所なりおと日吉田よりけふ宮市にいたる迄海を離れうけの  
 坂にのぼり南のかたを望めば古里ちかくみえて四極の山も遠からず足びきや兩子の峯夫と定  
 にはわかたねど霞のひまにほのみえて姫島は春の臙に打たくる地つづきたるがごとく二人も  
 こなたのかたや詠らんと望郷のおもひをはせ富海の宿に宿をこひあるじの名をとへば文七と  
 答ふ

十八日 富海より呼坂まで 九里半

朝くもりの空ものどかに足の痛もくつろぎぬ富海を出椿だををこし下手の宿をへたにあゆみ  
 て赤坂をこへ弥次市といふ所に白魚の羹にむすびなどとき路を南に出周防の諸島を望むに景  
 物豊の壇の浦に似たりおきの島をとへば黒髪とことふ島定めて若かるべしまたくろかみのす

へ頼もしく富海より四里強半毛利山城守の居せる徳山を出松間の粉壁を菩提所とおしへられ  
といしといふ駅にいたる町の中に大なる石あり四方に屏をまふけ前に七五三を引一の石に刻  
て日本朝四所八幡別宮影向石老人にとへば砥石と云定て由来有べし宮が坂をこへ山又山駅又  
数の駅をへて呼坂のとある家に呼こまれ日はまた申の初刻なりし枕によれば峯よりつたふ春  
雨の客裡の哀をそふに似たり亭主名は莊左衛門赤馬の関より防州小瀬川に至つて三十六里是  
芸州の界なり一里一里木塚子を立たり山はげて草を生ぜず松のみ有て餘の木をみず道は並松  
をうへつづけて芸州のさかひにいたる風景好らざるにはあらねど桜花甚稀に桃李も多からず  
春色故山に及ざるに似たり周防は長門より山多くして山も亦嶮なり水田多くみえて長門より  
周防の半に至て麦もさのみ麗しからず上一半は地もまた肥たり

十九日 呼坂より岩国をへ小方迄 九里 あきの内 是より 十八丁 耆里四

夜の雨枕のほとりに音信て旅寐はいぶせかりけり春の夜の短かきも八声の鳥を待かねて駅路  
の鈴の声すれば雨や晴ぬらんとつぶやくを友立おきて空はいとう曇りつれど雨はやみぬとい  
ふに力を得藤にさらばとて立出ぬ呼坂より三里半七曲といふ峠あり左に折て五歩六歩右に転  
じて九歩十歩頂は岩をうがつて路を闢く行先は猶谷ふかく雲は草鞋の下におこり松は笠のう  
へに響く流れそうて行行下り氏西といふ所より海道をはなれ一の板橋をわたりとある峠を越

松杉檜の木繁りあひて峯たかく岨なだれ鳥も飛にや倦なるべし周防なる岩国山を越んにはいのりよくせよあらきその神といにしへ人もよみし事されば社とおもひつづけ坂を下り十路盤橋にいたる此橋や世間の橋とことなりその橋上下する事五ツ中に四の石の柱脚を築く両方に角あり中程大にして水の怒勢をさく両の橋ふたつは柱あり中の三に置ずすべてその長き事百間橋板のつぎめ銅を以て是をはれり暫く橋の上に大あぐらかきて衣冠の士堂堂乎としてよぎるをも彼しらず吾しらず暫く労を忘るる事傍若無人岩国川の流長う續きてその穩なる事海のごとし水に沂り水に沿て舶の往来すくなからず山麗しく流清く地も又膏腴也西北東の山木を伐て敵を禦ぎ一方の要害を固めば一夫百夫にあたるべし山川の明媚に心を移し暫く時をうつしけるを船頭どもが橋のほとりに来り巖島へわたれ金毘羅へや詣づるむろ迄おくらんなどいふに隙いれて流に沂る事半里関戸といへるにして本道と合す山をこへ小瀬川ヲをわたり芸陽の地に入関より爰迄三拾六里されど吾徒は山口にむかしを問岩国に橋をみしかば行程四十里ばかり成べしこの里のあたりは農のいとま紙をすきて生業とす苦の坂は市杵島姫西より来り給ふとき自機の具を携へ爰にしてあら苦しとてその具をすつその処ひとつの社あり坂を下りにみや島のうしろを望み小方の浜に船をとへばけふは船なしあす社とてかどや孫四郎といふ者の所につきぬこの里のうしろに一大墟あり大木繁りあへり是福島正則城をきづかれん為已に山をたち石を集けるされど台命によつて是をこぼつ今尚本丸かんの丸なしの丸など、云所あ

り他国の者この山に登る事をゆるさず

二十日

花ぐもりの空鬱陶としてわたりに船の日和もなく旅ねいとはぬ雨のいたうふりければあるじの翁と首つきよせめづらしき物語もなくその日はくれぬいつくしまの神はふかく世の汚をいとふの由父死して百二十日母死して百日産して七十日地にわたりてすむ元より此島墳墓なしと云

二十一日 小方より巖島へ 三里

巖島より広島へ 五里

夜より朝にわたりてすさまじく風吹しきり雨も小休まずけふも枕や友ならんと佗しくおもひし折から空はれいつくしまへわたる船ありときき草鞋むすぶもそこにして船にうつりぬ誰かぬぎ捨しかぶと島はあたた島に遠からで山嵐に船ゆられ片帆にむすぶ帆の手もはや巖しまの岬によせぬ巖島俗に宮島といふ古に恩賀島といふ文人称して蓬萊と号す誠に三千世界も眼中につくる覧虹きへ雲はれて丹青も筆を擲にたへたり平相国浄海の建られし百八の廻廊竜の波に蟠るがごとく浜の手の島居のたかく潮の中にそびえ五重の飛閣霞に映じ千疊敷波に映

らふ大浜の石燈炉行をみださず大元の桜ちりもそめず峰奇に岬あやしく松媚草芳し神鴉弥山のかたに飛さり鹿は小路に人を恐れず一步に興を転じ一步に望を改ため千端万状みざらん人にはかたるべからずされど船の便のいそがれて尚目のとどく迄詠めける、のうみ島、あきの小富士と詠来て、ゑば島と云に汐を待、夕春日影の西の波間にかたぶきて万頃の金波山をうごかす楫枕の夢を山端の月に驚され舷によつて四方を望めば微風はだへをおかして秋の夕部の心地しき潮にしたがひ本川口に沂る広島は浅野少将の城にして一大藩なり太夫の邸水に臨みおもしろうつくりたる松は春の夜の朧にたぐへて文目もわかたねどかすかに詠めてねや橋の下に泊す

二十二日 広島より田万里タマリへ拾里芸州の内  
四十八丁道

眠ゆり起されて見れば江口万家朝氣の烟打なびく友人のいざといふに誘引れ夫より町を一筋ぬけて東照宮の廟にいたる松馬場は常盤の緑春ふかく桜馬場に盛過て残の雪衣をうつ朱の玉垣石垣のうへにそびえ糸さくらの二本鳥井を隔てて芝をなづ石燈のぼり盡して門の扉右に鉄拐左に蝦蟇僊をゑる廟の壮麗工をつくし眺望眸をさかんとす誠に神祖一度戎衣をぬぎてより三尺の劔匣に動かず我曹ごとき蒼生のすゑ迄もその恩沢に浴する事ふかきが如くたかきに似たりすぢかひに繩手を見わたし松原口に出かい田市に朝支度し千山の霞万樹の春柳の経桜を

ぬきの機もおちこち山の錦きてあきの大山といふにかかる是海道なりといへども西海遊觀の客あるは金毘羅のかたへ船よそほひしあるは室路の波に掉し又は尾の道に近道して多くは此路を経ずたつきもしらぬ山中を覺束なくも打過てさいせうの宿に休み又ひとつの坂をこえ田万里なる夷や十三郎といへるをこよひのあるじとさだめける所より二三里ばかり海辺只海といふ所の客とおなじくかへり船ならば塩がかりなどする事あらん、かならずとへなど挨拶してふすまを隔てて臥けり

二十三日 田万里より尾道迄 九里四十八町

彼岸曇とやいふ羊頭ヤツツとやいふ天もくらかりしが唯海の客に伴ひ輪光庵と云精舎の門前迄伴ひ一樹の下一河の流も他生の縁糸にしあらばかさねてなど互に笠とりてぬまの本郷にあやしき橋をわたり三原の城に入浅野家の長臣浅野甲斐の居城にして往還二の丸の内に入隍ふかうして水藍をもみ堀高して壁練をさらし要害疎ならず海を右山を左に浜をつたひ芸州の界この浜をへ備州尾道にいたる尾道備州の内なりといへども安芸少将是を領す主人山根や源四郎小瀬川より爰に至て行程二十八里一里塚は塚を道の左右に築きて松をうゑたり此湊は海路に便よく海をへだてて島をかさね江は一條の流のごとく風興あたたかも湖水に似たり西海北陸の舟帆を巻岸につなぎて数をしらず其繁栄下の関よりこのかた爰につげるものなし旅窓の下に枕を

敬れば東奔西走の客友をよび友にこたへ馬士は馬を叱し漁人は魚を担ひ巡礼は歌にこび旅客  
 は舟を尋ぬ山臥は堂塔の建立とさけび抜まいりは柄杓に慈悲とかなしむ憂を吊し慶にはせ絡  
 繹として昼夜を分たず尾の道むかし玉の浦といふ千光寺のほとり烏帽子岩といふ有此内玉を  
 かくす唐人是をゑり取てその国にかへるこの岩夜夜光を放ちし所是よりひかりを失すそのの  
 ち菅公昌泰の纜をよせ給ひ玉なきさとなれば玉の浦ともいふべからず芋の多くあるを見て芋  
 の道と社云べしとの給ひしと或人の曰己ヲが道と菅家がなどいへる女の家に入給ふその子孫長  
 くつづきて今ながへ町かなや吉郎右衛門といへる富家は正しくその末なり西国寺行基菩薩の  
 開基にして西三十三国の僧祿たりしも世は年とうつり物は星とかはりて已に廢しけるを某法  
 印靈夢を感じ讚岐善通寺弘法自刻の七仏薬師一軀を得て寺を再建すといへりこの鐘樓はうだ  
 の西白寺の門にして和泉式部が工になると云浄土寺は足利尊氏はをひらく猶多田満仲の建し  
 寺等名梵刹四十有餘高低參差として鐘声相通ずこの地に遊ん人は搜りてよく尋ぬべし我ごと  
 き忽忽たる征途のかく道に聞て塗に記て謬語さだめて多かるべし

二十四日

きのふの暮かた船人の来りて室への便あり風も追手なり一昼夜にははしりなんといふを主が  
 うけ取て備中のあたりは人の心もこころよからず難所の川も多しなど只管にすすめける海路

三十八里陸路三十八里いかがすべきとはかりけるを友人も長途の勞船に慰めんといふにぞし  
 かるべしとて朝より船の使待けるが日もいたふたくるまで昔信さりけり旅はうかりけり送る  
 も迎るも皆面染の人にして肱を曲る隙ぞ故郷なりし日午の頃船よりの便して伊勢御師の手代  
 加藤文蔵爰より華洛へと志す宮本七兵衛などいへる男と本よし丸といふ船にのりうつりぬ船  
 は荷もおもひ積しに船頭が慾に耽りて広島あたりの道者二十餘人のせてこみに込でその夜は  
 矢の島のほとりに漂ふ

## 二十五日

壽永のむかし平家已に戦まけて此処に支へける能登守教輝憤のあまり矢とつて打つがひ島の  
 かたに箭をはなつよつて地のかたを能登原といひ島をやのしまと云今猶箭竹を出すといふ俚  
 俗のつたふる処湘江の竹令公竹きつね崎の笹など皆同日の談なるべし阿太アフトは福山阿部伊勢守  
 の領地なり峰尖にして松茂れり岸辺に巖そびゆ石垣をまふけ堂を築き観音大士を安ぜり去々  
 年鷄林の客ここをへて岩の奇なるを賞し石垣をみて殺風景と歎ぜしと加藤氏がかたりけるむ  
 かし漁人綱を沈めて石を得たり是をすつる事数度ややもすれば綱に入よつて爰に祭りて観音  
 とす故熊本侯の鷓舟ここを過る船板節穴有て潮是より入舟既に覆らんとす侯心中に大士にい  
 のる忽牡蠣殻ありて孔を塞ぐ侯奇異のおもひをなし渴仰浅からず今猶往来金壹兩を納むを常



とす修復肥後より加ふといふやがてかの寺より小船おし来りて散銭をこふおもひくゝに錢擲て予も舩によりかかり所の名をとへば船人歌うつて曰

はしり出てはかまきて宇治をながむるむしま山

又櫓拍子をとりて

水島にまなべを入れてたくたきゞ

しやくはなきかくめや三郎

又我をかへりみて広島のうた有とて

瀬戸をこしくれくゝ行はかれない崎

高すを入れてのうみ島皆地名なり

鞆の浦はむかし神功皇后の跡をとどめ祇園は山城の祇園と一体なり波にうかめる青螺は筆も及ばず是をせんすいと云福山は夕陽を斜に帯て茫茫たり加藤子一爐に縁茗を煎じ樽をひらき肴をつくりて日の暮るも白石の瀬は海中に突兀として右のかたかうの島に接す是南海道の地にして今新四国と号し八十八所の札所ありとかやその夜水島の洋中に碇をおろせば驚涛船をたたいて夜自肅條たり

二十六日 此間 海上 十五里

山ねやがいひしは草臥足の甘言にて日日の東風やむ間もなく水島は波あれてむかしの鼓聲をきくがごとく志度の浦も遠からずとまもる雫つれぐに夜の夢を妨るに似たり

二十七日 下津井より岡山迄 九里八町

夕部は舟のものども集りて大にさわぎて博奕しけり吾等はしらぬ事なればみる事も面白からでかたへのかたに屈りふしぬ夜もふけてかのもどもふしけるがおきわすれて日の出るも知ざりけり友人と相はかりけるは舟中の鬱陶甚しまして心いぶせき客のみなり春の空の定なきを安閑として暮さんよりは去来イザ又道にとらん迎下津井の町にあり児島郡をへ天城といふに至る是古城の跡は城墟ともいふべき山暗ふ茂れり池田泉州三万石こゝに居す早島は幕下戸川三郎左衛門の領なり此あたり道ぬかりて足をなやます小わせは同じく幕下板倉右近の領地なり日は傾ぬ雨はふる雨雲のそこもしらず引つつみけるに黛のごとくにみへし山を岡山ぞと教られ日暮て中島川島屋安右衛門と宿へぬれわらぢをとぎぬ此内ひとつの橋を経橋も又大なり百間には過べし夜に入といへども往来憧憧としてたへず今夜は備中の道者そのほとりの修験主商人旅客打集り四方山の物語しける佐々木もり綱が渡りし藤戸をとへばけふ過し天城の橋の上なりといふ今は殊の外浅くみへて萩あしなどの枯葉みへたりしらざりし事を惆帳し跡の感を催せり

## 二十八日 おか山より三石迄 九里

是は宇喜田秀家の築く処の城にして備前少将ここに居す平城にして大川の流をうけ樓櫓霧横  
 たへ烟うごきて一都会なりよし井川の流を一葉コブネの航に浜り加賀戸に昼休しいんべにして古里  
 にて見なれしスエモノツクリ陶備前 焼備前 するを見いそのかみのこなたなる大なる池を過とある坂をこえ片上  
 の駅は雨にそぼぬれ又ひとつの坂にかかる山を下る僧の頭に烏巾をいただき身に三衣をまと  
 ひ傘をもてるにあふ吾等にあひて若き衆へ頼み度事の候と云にぞ定てあとより来る友ありて  
 是に言伝せんとの事ならんとおもひけるにかの僧いふ様吾は江戸より長門に下る僧なりかね  
 ても聞や及れん世に一休と称せらるるは吾事なり二人して六錢をあたへ候へさあれば子孫長  
 久のおこなひその身の加護故郷安全のいのりしてとらせん哀しひかな六道の街にさまよひて  
 世の善智識に逢ざる事を六錢纒なりといへどもその徳無量にして六万錢にもかふべからず吾  
 今行事の序かかる結縁にあふ事抑旅客の幸なりとしたり顔して云ける六錢の鸞眼おしきには  
 あらねどもあまりにいふ事のつらのにくければ我等は錢もてるものにあらず穴賢さなひぞ  
 迎通りければ苦り切てぞ下りける世には希代の馬鹿ものも有ものぞとて大笑ひし是を力に山  
 をこしぬけふは雨を帶る風も有けり定て舟ならば室のかたにもつくべき歟されど王孫草録に  
 して遠興すくなきにあらず杖の帆ばしら半かたぶき合羽の帆風斜にして道や海坂や浪と真帆

かた帆にはしりければ三ツ石と云駅なりける橋本屋源太郎といふ人の家をよき湊ぞといかりをおろしぬ三石は海を離れ山に入事三四里山高く地寒し三石とはいかなれば名付けると人とへばこたへて云ける此駅に神有三石明神と号す神体則石なり高さ二三尺ばかりその石の内又石三ツ並んで有是を海石川石山石といふ是を神と仰ぎつかふ備前公のこの道を経るや必代参あり又右のかた大なる石三ありむかし大石山丸が湯立をせしの跡なり縁記あるよし見まくほしけれど旅路にいそがれ祭神さへふかく問さりきたのかたの高き山村上昌通伊藤大和次郎村上村宗などいへる人爰に城をかまへて在けるよし城隍のあとなどものこりて俗つたへて城山とよぶ

二十九日 三石より書写の麓迄 十里

書写のぼり十八町 下り 同

ゆふべ同じく宿かりける備中のぬけ参り込ひとり男の妹を俱して参りけると夜籠てたち半道ほどへて一の峠に登る是備播の堺なり石表を立て字を刻まず探川のわたし船にのり片島へ出赤穂のおしへ木を餘所になしひる過て路傍にひとつのみやをみる馬場は線のごとく長くつゞきて松の木陰も濃なり処の名をとへば斑鳩イカルガといふ神をとへば上宮太子とこたふおほぎみの御名を忘れて村邑春秋の祭りもおこたらずや青山のかたより木槿茨やうのもの枝に紙のゆ

ひ附たる細路をたどり書写山円教寺へと志しすがふ川をかちわたりして小山をこへ書写の西  
 坂下につく是書写西面の路なり女人堂を経荒たる馬場を過山王の社前へ出づ是より上方巖そ  
 びへ松瘦て岸崩れ路欹ちて左にめぐり右に回り窈窕崎嶇とし谷をへ蘿をよづ隠見出没其状万  
 端なり漸く山の巔にのぼれば僧房軒をつらね扉半とざして唯僧のみ少しく往来す間雅まこと  
 に人間のものともおぼへず歩を移して本堂にいたれば処処の巡礼異口同音にうたをとなへ大  
 悲の号を讚嘆す闌によつて望をはすれば檻外数樹の桜あるひは葉のみに繁りのびあるひは今  
 をさかりとあらそひ松杉雲を宿して烟霞ふもとに起る人をして塵を出風にのるの興を催さし  
 む折から鶯など来なきて幽興も唯ならずおくの院など尋けるに谷に望む梵院漢をはらふ高樓  
 のきに夕陽の纒にかがやき雲も無漏の色を具し嵐も無常を唱るがごとし下界は遠く南海の潮  
 をただへ山陽の山林ひきく羅る笠を解杖をおきて悠然としてかへる事をわする山城なりける  
 巡礼に伴ひ東面の路を下るさきにへし路には似ず路清くはらひてありされど一曲一曲相めぐ  
 つて前の行は左に行がごとく後の行は右に行がごとく笠のうへに草鞋の音し草鞋の下に笠の  
 うごきて麓のかたも近く見ゆれども行事やや遠く誰彼過て東坂本あるじをば儀右衛門とやい  
 ふ爰にとめられてける関東の巡礼とて三人さきに宿して同じく夢見川のほとりに夢結びしけ  
 ふの道船わたし多し

三十日 東坂本より姫路迄 五捨町

姫路より賀古川迄 四里

賀古川より大久保迄 五捨町道 四里

日たけておき春に名残れる霜をふみ遠く天守を目あてにして姫路の町に出この処去年国政美ならざる歟一揆おこり故の大守松平大和守所がへあり酒井雅楽頭交代あり今城普請などありて役夫城隍のほとりに往来す黒田羽柴の二公もかつて爰に居し給し地なれば町城中にあり城も大なり豆崎は忠マユにして本道をわかれ右のかた曾根の天神に詣所マユづから神さびて神殿むかしなづかしく感古のおもひ浅からず松は御殿の左にあり株大にして高からず枝たれて地にはへりほとりは高くいかきして透迤として池に臨めり已に千年になんなんとして青葉朽せず榮る事神や宿るらんと有がたかりし所は海にちかうして小き町をほとりにせりシヅノイワヤ静窟俗に石の宝殿と云に行路を雨に遮られて人家にやすみ小路をへて松林に入斜に石壇をよぢ静に油単をおろし又一段あがり御殿をのぞむに一社にして二社作りなり中に額をかけて高御位大明神生石子大明神とかけりみやの下をくゞりてむかふに石の宝殿有横ざまに池の内に安じて上には樹など生たり四方の石壁崢嶸としてまのあたりに鬼工を見る大已貴少彦名のおわします静の窟はいくよへぬらんと詠し時よりもまたいく世かへけんあせ路を経るとて道したたかに踏まよひ賀古川のほとりに出出雲侯松平羽州の泊と宿札うつて川には馳走のわたし船酸漿カヌバミのもの暮風にそよ

ぎ上流に繋ぎたり是よりさきは道など人のほらふがみへけり野口をすぎあたらし町に休み長池より大窪の清左衛門といふものの宅にいりぬ備前は一里塚榎の木をうゑ木もあまり大ならず所所小松もみえたりはりまの入口猶しかり姫路より已東松をうゑたり此辺は山遠く地平にして四面渺茫たり藝臺タネの花のみ村より村に咲つどひて流黄の機とやいふべき

三月朔日 大くぼより茨木住吉 九里

壱里過て爰は明石の浦なりし朝霧の間に淡路島も間近く行かふ船も帆などみえて古歌の心を目前にみる事のうれしく城は町よりみえず是松平左兵衛督の城下なり城の東にあたつて人麿のみやあり門に正一位柿本明神と書て内の左のかた一の石碑あり石の龜あつて是をいたたく右にいかきして盲杖桜二株あり社はあまり大ならず垂水村タルミに仲哀天皇の御陵を拝し五色塚を尋けるに草をわかつて纒マシに小き路あり暫く登りけども夫とさすべき所もなく唯数の土饅頭壘壘として相ならべりとかく捜す内にひとり男は早畠のくろをつたひて出たり是にいそがれ麦の浪をわかち同じく町に出たり塩やといへる里是撰播のさかひ也さかひ川とて中に石表を立たるがあり三里浜は渚にして舞子松原の松はまふに似たり山はひよどりごへ、てつかいが峰につづきて道已に須磨に入遠く南海をのぞめば天はれ雲つきて釣する船のいくらともなく波に漂ふのみにして松風ばかり音信ける爰に敦盛の卵塔あり畔に小石など集り沙半は塔を埋

む右のかたへは茶店などおもしろくかまへたる爰にしばらく嘯き三の谷二の谷一の谷の古戦場をへ閻魔堂の左より須磨寺へいたれば寺に福祥寺といふ額をかけ石段の下に若木の桜ちりそめて天にしられぬ白雪も客子の笠をうつに似たり庭前に義経の腰かけ松あり爰を辞し東にたかき峰有、頂に松老たり高とり山とて平相国清盛福原遷都のとき愛宕の山になぞらへたり堤あまたある中に池の中心に小高き洲ありて榎の木ことぎの木ありて木村源五重あきらのうたれし跡を残したり池の西の端松の木三本有り小笹など繁りし中に新しく石塔は築て前武蔵刺史平知章之墓とあり兵庫は福原の地にして経の島に詣ける折ふし六部など集りて縁記をよみけり予によみきかせよといふ手にとりて是をみるに新京所せばかりしかば塩打山といふをこぼち此処を埋けるに朝潮暮汐□□崩され事ならざりしかば三拾三人の人ばしらを埋めんとさわがれしに松王といふものは是を歎き衆人の命にかわり入水せり清盛一切経を石にうつして埋ける故経の島といふつねに築島寺といふ経島山来迎寺と号す別に不断院といふ門前直に南溟の涛をのみはし左に臥船右に維く湊川はおもひしとは事かわり両に土手を築けるがごとく松は生て遠より望は馳道のごとしあるひは松の林に似たり沙ばかりうづたかくして水はたへてなかりけりこのあたりの川すべて平地より高く水なし 生田の森に春の来て木木もややうす緑のふかくなり馬場は桜の両行にうゑていまだ久しからずや木も若かりしその上のかたしげれる山の中布引の瀧にして此上より連綿として法道上人のひらかれし摩耶山叩利天上寺につづけり摩耶は高くそ



びへて寺は最高の峰にあり生田川は森より西にして湊川のながめに左のみかわらず水纒に流れたり夢野のさとは鹿や住闌フケノ野氷室ヒムロ円心が古城などとひしかどもよき人にはあはで聞ざりし烟波香に隔りて是や敏馬ミスマの浦といへば故郷の望もたへぬ海辺にはべる松有法然上人のいざり松と云昆陽野コヤノの里は爰とかや茨木住吉のみやに詣拝殿長くかまへ本社は四社なり山の手より牛車して御影石を御殿の浜御殿相つどふ神功皇后西征の時に皇居をかまふに運ぶ跡にしたがひ宮をすこし過加右衛門といふものの家に入れば追追阿州の巡礼も来り大阪なりける源兵衛といへる男も同じく宿かりける源兵衛とおなじく火燧にかかり雑談夜を深しける委しく明日の路など教られけるゆへ鼻紙の程にしるし尚此あたりの事をとへば是新田左中将尊氏と戦しの地にして求馬塚西にへだて雀の松原その下にあり今尚小山田が青麦かりし跡を残すか此身なげくらん津の国の生田の川とよみしうなひおとめの塚東明村にあり懸想しけるふたりの男の塚は西と東とに隔れり俗につたふ丹波太郎和泉二郎五百崎やあふぎ村といふは波間より現れ出しといひつたふ青木が原の旧蹟なり物語の序に古馬のはやしをとへば半道ばかりあなたなるよし遺憾少からざりし

三月二日 住吉より尼崎へ 六里

尼崎より大阪へ 三里河舟

同じく宿しける阿州の巡礼などはとく立けれと限しらるる道なればとて家の婦人におこさる

るまでねてけりすみよし川をわたり壱里ばかり過あしや川はあしもぬらさずこの西に纒にながる水ありかたた川といふあしや川なる蜚か淵は夫とさすべき所もみへず山の手を猿丸太夫の社と詠あしやの里に入る武庫山は北にそびえていかるがごとく打出の浜は松くらふ烟もかなたにたなびけり畠の中へ一の岡あり松数株生たり阿保親王の墓といふ俗伝に金と瓦とをここに埋めて

朝日さす夕日かかやくこの塚に

金千枚瓦千枚

といふよし困て宝塚と名づくとは定て嬰兒の談なるべし西のみやは宮いみじくいとなみて境内ややひろし社頭にさける桜の枝に

けふこずはみずややみなんかみ垣の

白ゆふかけし花の盛を

見てもあかず帰るさは猶忘られぬ

神のいがきに桜さく頃

と短冊を誰人か附ける拝殿のかなたに怪しき魚二喉をかけたたり魚の長さ三寸ばかりよこ二寸計りうろこあらく背につののごときもの三ありいかなる物にや外の参詣人も立つどひて眉をひそめけり庭に池あり池中に仮山あり中心辨才天を安んず松繁く水清して和光の塵もいさぎ

よし門外にかきしける松をとへば夢の松といふ爰より北海道をわかれゑた川をわたりなるは村より小松村にいたる道の右の田の中に松あり重盛松と云東にならびて榎の木の本に百文ばかりもするらん社あり小松塚と云定て子細あるべしおかの社は神さびて詣る人もすくなきが繁れる草むら露ふかく哀そふる体なりき尼が崎郭西田の中に竹や松などあばらに生て物ふりたるほこらあり融大臣六條河原に千賀の塩がまをうつされし時塩をくまれし旧蹟なり尼が崎はむかしの大物の浦とかや城のほりにして大阪への船をとへばのり手もみへず今出すべき船もみえずわづかに三四人の旅人を見附闖取にしてあらそひけり是はかゝしかりしいざ陸せんとて爰を過けるに已に出なんとする船にあひ城楼を舷よりのぞみておわだむらに源廷尉義経の手づからうゑし松をみる松は春ながら樹老て蔭も繁からず堀川なれば潮通じて柳蔭に舟を棹し塩梅よしの舟につけられ夫より伝法に浜りほどなく杵築侯の蔵本ある中の島にいたり往来あらためさせ常安町ジャッパンの田横町山田五兵衛是を主人とす桂をたき玉をかしぎて早明日は桃花の節となりぬ此地は西国一の湊にして誠に楊州にも劣るべからねど郷園の春ぞしたわれし

## 三日

大和もろこしけふは上巳の佳節と祝ひ悦ぶ事なる所は難波津の空も朧に雨もよひして旅心は

安からねど男女衣紋引つくるひ大道の塵をおこす住吉の汐干おもしろきよしなれど用などありて得行ずなりぬ肥後の病僧知豊といへると同じくふしぬ

四日 大坂よりならへ 八里

屋敷にして故郷への文したため久米氏へたのむ大坂の城をみるちかく追手のかたへ行んとしければ番のものどもきびしくとどめける城外春ふけても道けぶりを簇し行行吊古哀をそふ玉造口を出河内の国を過大和に入くらがり峰上下二墨樹繁く道嶮なり行かふ人の編笠は遙に峰に連りて天津星かとあやしまる春の日のうららかにほめきて三伏の暑さを催し漸く峰へ上れば茶屋どもしつらひて女ども大勢あつまりて人を留る事飢雀の囀るがごとしむろのき峠は微雨そぼちてならの地にいたりぬ爰に池ふかくほり廻し筆にも及まじき山の松くらう生きたるに峠もとめて鷺のしらうなる程集りけり湖山の風興をここに縮たるはさだめて旧帝都のほとり誰人の旧跡かきかまほしく一僧の過るに追附子細をとへば是を蓬萊山といふ武烈帝の御陵なり今通る道はむかしの三條通禁裡は北のかたに遠からず西大寺は右のかたに林を隔つ暮雨客衣にそそひで三笠の山におろす雲の若草に連れり今御門町白金屋清三郎といふ宿にぬれ支度おろしぬ夕飯しまふ頃はや当所の名物に候とて墨やかな物やさらし売又は所の絵図名所附などもち来りてしばらくつかれを妨げる

## 五日 奈良見物所 六十四丁

## ならより大野迄 十里

大坂の道者は多くは上巳を過して立事なれば夕部は南都のかた一盃の入込上を下へとかへしけるあかつきおきて神に詣でんとさる沢の池にのぞめば宿雨新にはれさざ波はかなたのかた衣かけの柳のいとをよるかとみへて雨の帝の上わらはうねめのみや池の西にありて面影や水に映らん浅香山松ふかく茂りて楊貴妃桜□□の森を詠め大鳥居を入春日野は妻やこまれる小男鹿のいくらともなく群り集り谷にのみ草に戯れ参詣人の跡を追てせんべいを求めるに似たり北則飛火の野辺なり此神はふかく山を惜み給ひて木の葉だに人のとる事をおしみ給ふゆへ木は大に繁り合杉ひのき松のごときは霜皮雨をしたぢ黛色天に参るに似たり御旅所右の一段たかき所なり故郷橋せんしゆ橋を過左のかたにはらへどのの小社あり社前に白幣シラニギテあり参詣の人人是をとつて身をはらひ行事なり神体瀬織津比咩神セオリツヒメノなり神かきの森藤の鳥居につづき廻廊をめぐりゑの本の神を排す是当山の地主なるよし御手洗川に手をきよめ春日の神を排すタケイカツチノミコト武雷命いわひぬしの命あまつこやねの命姫おもん神といふ外に石燈炉森羅として内には金燈籠相ならび相映ず御供殿にのぞきむすぶの神に詣れば誰とはなしはもとゆひの心をこめて結びしが白うなるほどにみえしうらわかみ根よげにみゆる若草山よりぬさとりあへぬ手向山をへ良辨

の建立せし法華堂俗に三月堂といふ瀧ありいとすぢのごとし二刀堂四川堂良辨杉俊乗坊の影堂鐘樓是等を過このかね口幅九尺壱寸三分あつさ八寸高さ一丈三尺六寸かね目四万八千九百貫目と云撞木はわざとうごかぬ様にこしらへたりつけどもならずといふは非なるべし是よりさきは朝比奈力饅頭とてことごとくしくさわぎて売けり其ことばにむかし朝比奈の菱秀此かねをつきけるに音出ずかたへのもちをくひつきけるとき浩然としてなりしとかや好事のものしわざなるべし大仏殿堂の高さ十五丈六尺東西五十間南北三十一間廻廊東西九十間南北百間仏の高さ五丈三尺五寸と云後光のあたりつくろひ有かとみへて竹垣たかくゆひまはしたり右のはしに虚空蔵のつくりかけたるが有是も餘程の古仏なり興福寺は七堂伽藍の地なりといへどもかつて祝融氏の災にかかり只望茫茫然たるのみなり五重の塔斜に南円堂のかたにむかふこれは三十三所の一にして巡礼の札はうづむるばかりおし附たりこれより白かねやにかへり草鞋のひもしめ直し上宮太子の建立の元興寺は鬼すむべくもみへず一のもといふ処に鳥居を松の打おほひて前一の石表をたて人丸歌塚とかき脇のかたへ此歌塚の事柿本講式清輔家集長明無名抄等委出とかけり是をば尋て在原寺の鐘樓を入本堂に観音大士を拝めば天井に龍おどり孔雀かけり右のかた在原明神と書き二社ありひとつは定て紀ありつねの娘の社なるべし一もとすすき堂の右にあり木堂のうしろへ廻り竹の林の間に浅き四角なる井ありくらべこしふり分髪の肩過し井筒の筒井是なめり法隆寺の道をわきに布留の社大和の社穴師の神も餘所

にみて行行途中の景を弄べば山四面に周遭して往来平なる事砥のごとし白波の立なる立田山は臙にして伊駒の山はたかくそびへ金剛山は黛の如く二條が岳は突兀たり丹波市のかたわらにして一盃髪の男いかめしき相口さして年は五十を前後の慥に武家の老人とみへて水涯立し男の人と物語しけるを待合せて楠が千早の城の跡をとへば是は金剛山のかなたにしてこなたよりはみへず南にひきき山二有ひとつは天神山さきのかたに在社神武天皇の都し給ひしうねび山なり順慶が汲し筒井は遙あとのかたにして順慶が幕下トウ井某が古城の跡東に高うそびえたり辰巳のかたへ人家群り森ふかうみえたる社人皇十代崇神帝の御陵柳もと也吾伴ひゆかばこまぐくと語るべきになど念頃に会釈してわかれけるみわのまへにしてひとつの小山うつくしうしげりて山をめぐりて一段づつの階級あり人にとへばはしつか山といふこのあたり三輪の旧跡おだまき塚あるよし尋ねあたらで神前の茶店にのぞけば面の皮のあつき女どもが客とめて素麵くへと囀るもかまびすしく松両面に連れる馬場を遠く過てける神木は折て往来のうへにふしたり禰宜が鈴ふる音のみ亮々たり本殿は今普請なり近道して山をつたひ金屋といふに出是迄路を南に行是より三輪山をめぐり丑寅にむかひこもり日の初瀬の山は峰たかく泉清く木老たりそぼふる雨もいとはずとめ女の手をふりきり自然石のおもしろくしつらひたる手水鉢に手をすすぎ坂は廻廊の中に過竹妻手のかたに茂りうらてに山吹の今すこし笑ほころびたるも処づからおもしろく本堂にいたれば貴賤群集引もきらず折から本尊開帳ありけりか

け造りは雲を踏烟を凌がごとく闌の下にはいくばく樹の桜か開謝の色をあらそひ仙境のおもひ浅からずはい原の駅にいたれば日もまださのみ遅からざりしを例のとめ女にかかへこまれ無体に引ずりけるを漸にげ出丹はてのかたへゆかでおうの源兵衛といふもとを宿すいせをとへば二十里とことふ夜に入はおびただ敷雨ふり啓蟄の頃しり貌に雷など暫なりけりはい原より爰に來るの道山辺といへる処赤人の塚などあり海道よりも遠からずとなんしらば立よるべき物をのこり多かりき

六日 大野より二本木迄 十一里

宿雲谷を埋めて山路蒼茫たり山をこして一の寺あり慈尊院大野寺と云春日の作とて岩に五丈四寸の弥勒仏をゑれり川を隔ててむかふに立つ牛の舌といふは大和伊賀の界にして漸峰峰の露もはれ□田村に源空上人の碑をとどめ黒谷といふかたをながめ名張の町は藤堂宮内爰に居す新田と云より限りなき長き松原へへてあをの伊勢路の駅に足をやすめ青ごへにかかりける此山はさのみ嶮にはあらねども仰げば弥高して峰に峰をかさねたり柘植ツグキの木多く繁りて青山の名にそむかず此頂伊賀伊勢の堺なり鶯多くすみて麓より上る道すがらほのきくに実に彼もおのがさまざまに啼声もひとしからず峰をくだり又ひとつの峠より望めば伊勢は一望の中につきて宛も掌中の菴摩羅菓をみるがごとし上る事二里有餘下る事二里有餘却てあとのかた



を望めば諸山雲はるといへどもひとり此山のみ雲の鎖してあげやらで行行洞下の僧に逢是を労送の月草としかいとうの宿をぬけ二本木にとどまるあるじ清五郎

七日 二本木よりおはた迄 九里

ねざめにめしたけとて家のものをおこしければまだ鳥も啼ぬよし大笑ひしてふしけるがさまざま故国の事など夢みて醒れば窓も白みけりかの僧どもに爰を辞し六間茶屋迄は伴んとて猶青山の麓を下り野原を過雨を催す雲千山の腰を擁し風をいたむ遅桜は弧村の垣根に露をおもみ眺望一方ならずされどかの僧も風月の情にとめる人にもあらで俗談する内六間茶屋に出ぬ爰にして京海道と合す是よりわかるべしとて笠とる間も女どもにはしたなくとりさへられてわかれけり是より上下の参詣も多くて三宝荒神に夫婦親子の袖をつらね二宝に馬子と駄賃あらそひ山駕籠の睡に幾ばくか山をこしのり物のすきまに衣紋なまめかしくうらわかき初もとゆひ□道をいたみ頭に三秋の雪をいたきながら杖も携へず西国のぬけ参りは寐むしろを脊におひ関東の巡礼は金剛杖もいとりし笈摺オイヅルは白かるべきをくれなるの一入染もへしも有迷故三界城悟故十方空何の国の何がしと笠は反故にかきちらせり是は時めく人なるべし鍵に主人の威光をてらし前駆後騎をしたがへ世捨人の身をいづかたともなくうかれありく墨のころも中荷騎のあき人は心に大利をかながへ百姓の一つれは苗代の物語比丘尼は袖をとらへ歌う

たうてつきしたふに乞食のめし行李に銭壺文と人をむかへ千種万変僂提携しけふをかへり初と西にむかひ明日を社参と東をのぞみ世はさまざまなりけりまたる人はなけれども松坂にのぞけば髪ゆへ月代せよせかまれました日もくれぬに新明星を過明星に出笠はあるのに笠めせよ烟草すわぬを烟草人と両わきよりよばれゆたのといへる原を過おはた半九郎といふものへ宅をかり旅装を解けり

八日 おはたより 外宮 壺里

処処見物 五拾町道 七里のよし

七里はなかるべし

朝まだき大夫の許につくべしとて宮川のほとりにゆけば早代垢離とらんとて子供ぞ袖にもつれける是を始として船ばかりは神よりの馳走にして垢離場にむしろの賃をせめぐ比丘尼に銭擲て福島塩焼大夫にいたる爰は豊肥の檀那多くして障子を隔我隣邑のものも多かりき又豊府生石村イケンの名主與左衛門とふ人にあふ三人連なり是も陸路へて大和めぐりし爰にいたり猶信濃なる善光寺へと志など談る内朝餉出来て追追挨拶人に宮めぐりせよと会釈せられ笠持ながら玄関へ出れば馬子どもが馬引よせ玄関にて道者の笠をはたはたと争ひとりてその笠をしるしに彼是をのせて外宮へ参りぬ去年造宮有て宮の金碧日に映じ霞をおこすににたり是国常

立の命にして誰かその沢に浴せざるものあらん何事の内に有かはしらねども忝さに涙こぼるゝと西行法師のよみし如くかしこまるしでに涙のかかるばかり有難くおぼへたり四十末社といへるはずきの垣をたかくゆひ廻し木の闌を曲らし屈曲長短一ならず小きみやにきこえざる絵をかけ禰宜どもが或は帆かけ島帽子にひる過のかけ衣を着しあるひはひだつぶれたる袴きて扇ひろげ手をささげて疫神にて侯厄はらひの神明星三ヶ月目のかみ鼻の神とさまざまにいきすぢはりて叫ぶかたてに神前のかねに自の袂より錢を擲て人をせたく性来慌惚として目のまふ程めぐり雨のみや風のみやなど過、天の盤戸に攀上る山高く樹ふかく道つくりとて鶴觜を携へ帚を握りて錢もろふ盤戸は洞の奥にして燈明をかかげ禰宜ども集りて是も同じく錢を乞右に転じて高間の原の茶屋に休み爰を回て馬に跨り人はおしへねど相の山の名もしるく比丘尼は鞍にすがりいつくしくこしらへたるたり子どもの啼啼つきてはしる乞食両の脇より笠をささげ杉や玉やなどいへるが三味線胡弓をかなでる子どもはささらの客まつもいたひげなり御裳濯川の流きよくうぢはしをかかると時節に逢あひて天照すおほん神の広まへに謹み敬ひ奉幣し八十末社をめぐりけり御手洗川に酌水の影さへすみて五十鈴川や天の浮橋雲に架しうごきなき世のためししる外宮はちぎ九本片そぎ外よりそぎたり内宮はちぎ十本片そぎ内よりそぎたりあさくまの山はあさからで上る事五十一丁下る事五十丁桜花さかり過て鶯の声老たり壺丁壺丁に石塚子を立たり半過て茶店に遠目がねあり二見の浦をあけてみるごとく阿漕

のかたに連りて白波天を蹴て尾張のかたに茫茫たり二見のかなたに松あり和泉三郎と植る処と云て伊勢の大湊にかかる船定て限りなき客愁をのせてそうかふならん鳥羽海道の馬子かとりなり迄も鮮にみへて面白かりし難波のあしといへるはかたはなるよしかなたのかたにありと案内に教られ程なく寺にいたることしは本尊福一万虚空蔵の開帳なるが坊主どもの墨染の衣きながら赤面になりて擲錢をすすむるもおかし山下に太夫より馳走の茶店有此に休しものと所に来りふしぬかの生石の名主けふ終日の友なりし

九日 伊勢山田より松坂まで 五里

今朝もいろいろともてなされ太夫出られ盃など有て日巳に午に垂とす中川原松兵衛と云かたへ太夫よりの祖席あり生石の人人へ爰にてわかれ故郷のかたへむかひけるおもへば路程二手有餘里を隔て幾度か金鳥の西にかけるを見き月二度円ならんとする迄旧里の消息も打たへける諺に地獄を棲のたとへにや蓬生の宿恋しく杖かきならして松坂や清兵衛といふかたへ宿を投ず暮になんなんとして雨肅肅たり

十日 松坂より坂下迄 拾壺里半

残んの星空にきらつきて北斗漸く闌干たり夜は六間茶屋のあたりにあけ曉の風肌を侵し山

山の高根高根に雪積れり雲津川といへば渡れる橋鵲の橋ならん藤堂泉州の城下安濃津の橋より大手のかたを望み町は烟草入のかざりて錦をさらせるに宛然り、くぼたよりとうくののかねかけ松は今はかれてその株に注連をはれり下関に孫六が流の鍛冶有立よりて尚西の方へむかひける是むかし鈴鹿の関の旧跡が今その跡ともみえず数の客亭相連り誰とがむる人もなく坂の下にして例の女どもに引ずられて動されずあるじさのや安左衛門

十一日 坂下より草津迄 拾壹里半

鳥羽を立ここにとまりけふ京へかへるといふ客ありいざ伴んといひけれどもかく遅なわりければ此男は先に出けり町を出て山に上るひとつの宮あり石垣もたかく築きて雲樹森森たり道の傍に祢宜が鈴もちて居たるにとへば鈴鹿権現とて天照皇神のあらみたま也と云云是に詣。又坂を攀るに樹ふかく掩ひ巖尖くそびえ道ふかく湿ひ霜白く置り谷ふかく松老てそこもしれぬ山中に鳥の声さへ幽なり是田村將軍東夷を亡すの地なり誠に風景の勝世の常ならず上に茶店有此ほとりに小きみや有往還ちかく散錢箱をすゑて坂上田種仁とかけり朝げの霜の寒さをも土山の朝陽に忘れ水口にわらの穂むしろの細工をみてなつみの里に水機を見る我やすみけるそばの床几へ是も三人連なるが風呂敷おろしぬ物がたりするをきけば慥に豊後なりと聞なしてとへば豊の真玉といふさては遠からざりしいざ是より伴んとて石部より梅の木の里に

来るこれ和中散の出る処なり家のまへには馬立をしつらひ泉水仮山心をつくし三上山を見込にして表のかたには車轆轤として葉を磨す風呂に湯をたぎらして過客の足をとゞむ手代多く集りて物ごととりしらべ居たり日西に春く頃伴ひける客の喜兵衛といふもののかたへ宿かりける所に同じく宿す是草津の駅なり

十二日 草津より瀬田迄 壱里半

せたより石山寺 拾八町

石山より大津迄舟 二里

大津より坂下迄 弍里

坂下より比叡 上五十丁  
下五十丁

修覚寺より京三條迄 壱里半

合捨里半

天晴風おどろかず草津を真玉なりける客とともに立出ればうばが餅とて女どもうる声かまびすし瀬田の長橋虹のごとく湖水の中を横ぎれり是をわたりて真玉の客にわかれ大道を左に石山寺へと志しける寺門たかくかまへ両行の桜盛過てか葉もやうやう緑ふかく木陰れて鶯など友を呼けり石燈數十級石奇に巖のごとく丹青も筆を擲つべし是は是はとのみ別に賞する言葉

もなし寺院幽にふかく溪水清くそそぎ尚さきのかた大観亭に遊ぶ是俗に八景堂といふ琵琶の海水天をひたしたななみ山よりかがみ山につづく緑の黛を縮ね東南に連綿たり瀬田は一條の帯のごとく比良のかたに雪はあらでかたの浦にたつ雁も文字書捨てかへるならん日枝の峯よりかなたは霞鎖してあやめもみえず寺前より湖水に棹して一葉のゆく所にまかすれば虚をしのぎ風に御するがごとく今こしかたの道に小き石橋あり是夢のうき橋なり湖上風しづかにしてふな引綱ものどかなり三上山を舟子が問ずがたりしてむかし富士権現一夜に此処の土を駿河にはこび富士をなす今一箕にして夜あければ是をすつる処此山なり故に近江小富士ともいへり俵藤太がいたる百足この山にすみけるゆへむかで山とも是を称すあるひは鏡山といへば旅のやつれも恥かしく淡津が原に松もあばらに一株の松一株の桜石のしるしのみえたり今井四郎兼平が墓なりと指点して教ける膳所の城は湖にうかめるごとく高抵曲直透迤連連たり城南のひとつのかまへは陰居所と云すずみの亭あり本多下總守ここに居す長柄山より西のかたより比叡比良野遠く若狭のかたにつづき長き事二十四里行行舩を敲いて大津の浜に上ればここは湖水の湊にして処も自にぎはしく茶屋の女は父君が風流にはあらねども墟にありて客をとめ銀座は天秤のはり口に眼をすかむ日午の鐘響きて園城寺に攀むかしの繁榮にはあらざれども寺門淡海に臨み楼閣たかくそびゆ処は海道にほとりすれば往来の過客爰に過らざるはなし堂塔玲瓏として風景世の常にあらず爰にも一の堂あり湖水眺望の所となす角に遠

目がねをおきて辛崎の松若狭海道をみせしむ寺院竹間にふかく鎮して寺門の石垣むかしをしめすさぎ波や志賀の都はあれはてて夫と訪ふべき処もなく鄙びたる枝折戸より山吹の綻び青柳のしだれたるやむかしのまゝの姿なるべし滋賀山寺へはまいらで辛崎のひとつ松見に行けりこのあたりも茶店八九間もふけ好事のもの松見にゆくを待なるべしからさきは湖水にさし出めぐりを石垣にてまろく築廻し前は鏡山に対す松下から崎の明神居ます徐に歩いて松のかたへ行けるに跡より男来りて松下貴客あり必率爾あられなどいふゆへゆきて苦しからずやといへば行分はくるしからずと答ふさらばとて社の後はめぐりしばらく松を賞す偃蓋亭亭として長枝湖の上にかけて千歳の緑袂にみつ表のかたへ一乗寺の宮うす紫の衣にて僧一両輩扈從両三人麻上下ため附何やらん興じ給ひける長居は恐れと爰を辞し東坂下におもむきけるここは多く烟管を以て経営とす町中に柳八本大木あり下平にし芝生たり目代よりの高札として此芝損さすべからずと也人にとへば山王の神輿舟にめすの地なり比叡は伝教大師の開基にして王城鎮護の為都の鬼門に相あたり峰峰そびえて攀べからず谷ふかく松たかく時として山鳥の声するより外に物なく道は掌を立たるに似たり建武のむかし新田左中将義貞鳳輦を護し奉り此山により足利勢を引うけしの地耳にきく事の久しかりしがここに臨みて倩おもへば誠に万夫も破る事能ざるの険なるべし山深して尚桜ののこる雪袖をはらひ坂は半過ぬらんとおもふ頃かへりみて湖上を望めばかねてきけるに違はず日枝の谷あいより水海は扇のごとくみえて



辛崎の松かなめの如し尚松の木蔭より流遠くつづきて見おくる島の影さへ霞の内に立かくれ杳渺として限なし山八九分已上は杉ふかくしげり吾たつそまに契ありてここに来ぬ寺院は谷の間間に木蔭れて高下隠見見がたく数へがたしこんぼん中堂二十四間十八間棟雲をささへ霞霞を起し四面の廻廊籠の蟠るがごとく鳳のかけるに似たり両方に竹あり石のいかき有葉師の杖なりと云講堂のわきに老たる男の茶をうりける所に休み道などとひ戒壇院より雲母坂というおしへ木におしへられ四明の頂に至る仰げば雲に上るがごとく下れば谷に陥るがごとし雲母坂はおもひしよりもはげしくしてやうく修覚寺のさとへたとりつき雲母寺のかたより京をさして急ぎける春の日の長きも繋れぬ駒のあゆみに院院の鐘声処処にひびきて月とくに寺町を過三條かしわや三右衛門ここにやどる家あやししくしつらひたり客は二階にあり家のもの中間にすむ其下則諸用を便ずるの所

十三日 五里半ばかり

柳馬場二條下る処島本何がしに家君などの文もあればとてここへ暫く腰かけ先内裡へと志ける外ほりは水浅くたたへて松をうゑたり公家の門ふとく洞にしてかなたこなたと教えられ爰にて案内やとひ東門俗に日の御門といふ仙洞この南に居まして藐姑射の山ぞ常盤なる鴨川の水この堀にわづかに流るるのみ南門ふかく鎖して清涼殿の棟ほのかにみえたり西のかた紫震

殿を望み西門は洞に開たりのぞきて内をうりたへて窈窕として物静なり誠に人間天上の文物を詠る事の有がたくいみじくぞ覚ける徳に在て険にあらず堯階三尺とかやいふ城高きにあらず堀ふかきにあらねども千年の星霜をへて北極魏魏として移らず四輔三台めぐりめぐつて衆星のむかふがごとく今尚むかしに異ず豈異国羯鼓の生臭き朝には犬羊と称し夕部に君主と称すると日を同して語るべけんや上中下立売は富家のみ多くつづきて八間茶やの遊里に臨む北野の廟は文墨の太祖として一夜の松雲をはらふ絵馬堂はいやが上にもしほ草の書あつめて拝漱深沈たり珠簾ふかく隔てて神殿ふかく閉たり西陣のかたに至て絹をおる機杼の音家に札札たり大徳寺より今宮に出笠を千本松の下にとり戌亥のかた愛たごの峰にはゆかでの峰の麓を嵯峨うしろを丹波とおしへられおもひしよりも浅かりき蟬の小川をうちわたりて神垣の内に入是上賀茂のみやなりあけの島居玉垣に連り老木若木もろともに深く繁り境内殊にひろく芝生て秋草黄なつしか青くなりぬこのあたり海道にあらざれば車輪馬足の塵もいたらず自閑雅の氣象有又一の島居をこえて賀茂川の水せき入し溝のおもしろう遶り流れたるに橋をわたして神殿は小高かりけり廻廊簾をおろしてすべて丹青の飾なし南方の橋は楠の石となれるをかけたる又川を西にわたり土手を下る洛陽のはしばしはことごとく竹をうゑて川や渭川の竹にも比すべし恋塚は川をへだて林を隔ててそこともしれず下賀茂の神社陰陰として糺の森に楓の若葉しげり合景物上賀茂に垂べし定念仏の声亮亮たり是百万遍なり本殿六角にかまへ

内外の二宮を初日本六十餘州の神神中をかこみ宮殿あたらしくみえたるは吉田なり真如堂を  
 過て新黒谷にいたる諸侯士庶人となく墳墓壘壘としてその限をしらずその中間に金仏四軀あ  
 り刈宣桑田親子三人のしるしは地藏なり赤穂義士のしるしは石碑有源空上人の堂のまへ敦盛  
 熊谷の五輪相對して立り蓮生房が影堂の傍房が兜をぬぎすてし跡とてかぶとなりの池有寺前  
 に房がよろひかけの松とて半かたぶき半くちて中程は丁寧に板にてしつらひたる有つぎに小  
 き松のおなじ形に傾しは定て此松の家督なるべしと戯れ青蓮院門跡より田の中の道を過むか  
 し延曆寺全盛の頃このあたり迄寺院ありしよしゑの木の老たる株ありて五重の塔のあとと云々  
 悲田寺は跡のみ残りてししが谷のあたりも遠からず是則大文字山にして大の字のあともみえ  
 たりやうくわん堂南禅寺は遙に詠めて知恩院のうら門に入浅黄桜あり是より稍々につきて花  
 は雲をぞおこしける楼閣たかく大にして洛の一大梵刹なり撞鐘是を日本一と称す門前華頂石  
 より天より下ると云山門華頂山の額は仙洞震筆となん白川の流もほそく祇園のかたにいたる  
 爰は貞観年中に草創の地にして参詣の袂引もきらずあとをおし前をすりて憧憧こととして蟻の  
 ごとし門前に茶店弓場揚弓芝居路三街九陌に接して少年遊樂の所なる八坂五重の塔をながめ  
 安井の宮の内に入今大日の開帳有て菊桐の幕のほとり女は妍媸となく男は貴賤となく相過り  
 相去る四條通をなわてのかたへされば朱簾夕陽のまへに半塞げて青樓の紅粉袖をつらね今夜  
 は三條大橋を過大和や古兵衛が亭にやどる日はよしみねのかたに沈めども楼外忽忽として雪

踏の音たへず

十四日 京よりふしみ迄左之通にて五里ばかり

伏見より大坂迄 川舟十里

終夜ふりける雨も今朝ははれぬ誓願寺に遊び泉式部の石塔をみる軒端の梅は実をむすべり後に二十五の菩薩あり石仏なり老たる柳一樹あり此処三條六角堂なり大谷にいたりうら門より出で日觀上人の墓を見行行音羽山をのぼればいくばくの墳墓ぞ長臥の人を擁し花も露に啼鳥も風にいたむに似たり景清の影堂より清水の門に登りてのぞめば二條の城突兀として洛中一望の中にあリ薬師堂の開帳より舞台の欄にのぞめば音羽山の暗き程しけり其下は千壽の谷にのぞむ奥の院東にあたりて遙にひきく涓涓として落る水是鳥羽の瀧なり觀音大士陶を好るにや清水焼の工をきわめて町のかたに連れり秀頼再造の大仏堂廻廓石垣瓢渺として雲おこり霞わく盧遮那仏南都の像よりも大也南門を過て鐘ありおもへ慶長元和の大阪の役此かねにおこり四海の紅塵天をかすめしも久しきにあらず三十三間堂より東西本願寺に出町をはなれて尼寺に入いかきの内に水通ひひとつの甕をすへ水を湛ゆ誕生辨才天也池に鯉鮒のあつまりておくに見入しれたるは六孫王の宮也東寺はむかしの繁榮には似ず礎のみ多く残りて堂堂いにしてへにあらずといへども境内甚だひろし松間に高く秀るものは五重の塔也南に仁王門ありおも

ふに妻我の孫三郎勇をふるひしの地は九條を東に通れば名のみ残りて菜園に水をそそぎ麦隴の草をとる人のみみえたり東福寺は七堂伽藍具足の地なり門を入れて上る事数丁廻廓をわたり通天橋より谷を臨めば楓樹千重ふかくおほふいなりのみやに笠とりて暫く労を休けるは神もゆるさせ給ふべし少将なりける人のすみし深草の里よりすみ染にはゆかで藤の森の神社を過いそがぬ日もここにくれて伏見の船場にいたれば流にそうて下る客我のみならず漸舟にうつり暫纜もとかで込合けるに茶よ酒よ餅よ菓子よと岸のかたよりかまびすし月に乗じ流に順ひ一睡の中に淀のあたりは夢にみて八間茶やに着は日已に出

十五日

前の宿を尋ねて湊橋のほとりに来りけふは恙あればあなたとへめぐり御堂へ詣宿にかへりぬ出雲の道者もおなじく来りて宿をかりける暮かた豊の今在家といふ処の船来りければ此船に約束してける

十六日 路程三里ばかり

春の日のあたたかなる旅の心もうららかにして雲州の客もおなじくあるじにさそわれて天満宮を拝し絵馬堂に時をうつしうしろにいたれば種木やは種種の心をつくし蘇鉄の老て矮き松

の曲りて疲たる躑躅の露笑へる楓葉の春に紅葉せる春菊のほとりに淵明はあらねど海裳の眼に楊貴妃の倂もみえつさくら草のあたりに駒繋ぎ草の覚束なく鼓子花は咲ざるに蒲公英うつくしう綻びてちりぬる梅の木蔭に立やすき日影もしばしば柳の糸に繋れて池中の金魚など詠めやや時をうつしける天満の長橋に清き流をながめ上町の太神宮高津のみやいくだまの神にぬかづく此辺はいろくの観多く煩囂甚し四天王寺にいたれる折から望日山東福寺の出開帳ありて色色の宝物多かりし中にも晃殿司の涅槃像は聞しよりも尚まさりて沙羅雙樹の梢雲井の月をささへ羅漢声聞生けるが如く動くがごとし吳道士が墨妙も恐るるにたらず精をきわめ筆を鼓し龍躍り雲わくに似たり亀井の清水汲手隙なく聖徳太子の影堂は燈を点じて窈窕たり五重の塔雲を画て足虚をふみ身天にあるが如し高樓洞院人間の眼を迷はず実や太子守屋を打てその戦功をあらはすの地なれば世に威を立る事まことにかくの如くなるべし遙にみえし茶白山は権現公の陣所なり清水の蘭若や音羽の景をうつしえて舞台の闌によれば難波津や民のかまどに立けぶり粉壁瓦閣は一面にして東西の御堂亭亭としてたかく秀づ闌下山吹など面白ふ咲みだれさかり過ぬるの桜の青葉の雪とちりぬるも無常迅速のをしへなるべし此ほとりの家は楼つくり立ならべなつならば涼しかるべし千日は大阪の茶毗所なり道頓堀にからくりみて尚市廊をめぐり家にかへれば衣をうるほす雨微々たり

## 十七日

けふは芝居みんと出雲のものと約せしかど船今夜出べきよしなればかたぐ荷など形附船におくりて屋敷にいたり切手などうけとりさまさまの仕廻して誰彼ふなと橋のほりにして船にのりぬ

## 十八日

残月沈沈として西の海に沈み漏鼓丁丁として城のほとりにきこゆ難波津にむすぶ夢もこよひばかりにして流れにしたがひ櫓声静也大阪は無雙の湊にして余五の湖の流をうけ山陽南海九国二島のごときはいふに及ばず東海北陸の舟迄も纜を爰につなぎ帆を爰に巻て管軒をつらぬ檣林のごとく潮に乗じて下り潮に従てのぼる朝嵐の空ものどかにこしかたの山にもさきの面俯つゝがなく一の谷のあたりに撓をとどめて万里の眸をさく昼より西風のすこしく吹ければ船をこぎて浜をつたひ陸路の人と物語するばかりちかく須磨あかしの風景は船こそ猶まさりて面白く覚ける夕陽影うすくなりてとまり鳥のねぐら求むる声のみして鐘の声遠くひびく船人にとへば高砂なるべしといふ是や響の灘ならん漸十八夜の月の船にさし入て東風もつようなるままはりま灘をば夢にわたしぬ

十九日 讚州丸龜より金比羅往来 六里

船ものにとへば灘は過ぬ枕をあげて望をはずれば月は小豆島のかたに傾き日は江島のかたにかがやく旅はうし窓もはやいぬ島と気もいさみ八島壇の浦のかたも黛のごとくやくりが岳高く聳え大づち小づちの島を過ればこの頃へし下津居のかたも遠からず静に峡中の風景を弄べば無雙の眺望なりいわんや風おもむろに天はれて鯛つる船は沖のかたに所も得がほに舷をたたきうかれ行七島六島などかぞへて日いまだ未なるべし讚州丸龜の川口に船をよせ岸にあがれば城はたかくそびえて松ふかく鎖せり飯山はさぬきの富士と名にきこへ南に向て行事数里象頭山をのぞむに宛然として象の臥たるにのれり是金毘羅の神鎮座ます山なり市場はこの頃の塵芥引ちらして島井に象頭山とかけり町は男どもの出て客をとどむる事しきり也杖に扶られて山をのぼれば雲樹深沈として谷ふかく峰そびえ木闌石闌曲り遶りて宮殿木ずへを出小ふし闌にかみて下界拾ふがごとく一絶景の地也釣鐘は人のつくにまかせて二六時中の堺もなし殊にこの神は舟人のたうとく仰ぎて南去北來の船客爰に過るもの往てその冥助をいのらざるものなし山頭日漸おちて暮烟籠をうづむ暮を帶星をいただき船さへ我屋と急がれてもとの湊にかかりぬれば漏鼓五ツを報ずあまの原ふりさけみれば月も朧に船もやひをときさしくる汐に船は出ぬ夜嵐の雨をつれて海の面も霧ふかく船よばひする声のみかすかにきこえてける暁がたにとへばゆけにきたりぬと云



## 二十日

いわきに塩がかりして筈もる雨を友とせり此ほとりの船は皆吾国の人にして呼かふ物がたりも遠からず雨はれ雲飛で西風いたふふきあれければ唯まぎりにまぎりてはなくなり瀬戸にいかりをおろしぬまへに松おもしろふ生る青螺有舟のものにとへば天城とて古城の跡と答ふ

## 二十一日

空ははれぬと四方の山山かすみつつ西風の吹つのでりてければ枕を敬てて波瀾をきくのみ折から隣の船よりしれる人の問きたるゆへ又かなたの舟に遊び象の戯などさしける

## 二十二日

朝なぎに残れるかつらのかたにむかひはなくりの瀬戸をへて四五里ばかり書写の性空上人の遊女と酒盛せられし時実相無漏の大海には五塵六慾の風は吹ねど随縁真如の波たたぬ日はなしと詠ぜし周防の御手洗の沢辺の風も音信れてささ波立や露ふかくいつきてみんとおもひけるいつき島より灘にのぞみ藍の島を過櫓声に眠を催されふたといふ浜に塩がかりして戌の刻ばかり沖のかぶろに泊りけり春の夜の暗はあやなしその所ともみえ分て雲井にまがふ沖津波

の波間に星の影すみて天の河原に吟ふらんと狂興を催せり

二十三日 今在家より 富永 三里半

出る日に背き傾く月の跡を追て霞の隙にかまどの里を望む今上の関と云是なりいわふ島うわしまやしまを出て西を望めば木綿が嶽よりつづく緑の足曳や両子の峯に湿ひて程なく今在家の浦につきぬ故郷のかわらぬ色も命なりけりとつぶやき桜八幡の廟を拝し馬場を出ればはや麦秋の里に来て日暮に茅門にたどりつき桑梓萱堂依然として三徑の松竹も清陰を改ざりけり

大阪より海路おもふに百式拾里ばかり

海陸四百里ばかり

陸路式百三捨九里

船中百六拾壹里

- 「東遊草」(『梅園全集』上巻、梅園会、名著刊行会発行、二〇一〇年十月)所収。
- 本文中空白の部分はその字数分だけ□で表示した。
- 原文の旧字は一部を除いて新字改めた。
- 本文中の句読点は、原文のまま。
- PDF化には $\text{\LaTeX}$ 2 $\epsilon$ でタイプセッティングを行い、`dvipdfmx`を使用した。

科学の古典文献の電子図書館「科学図書館」

<http://www.cam.hi-ho.ne.jp/munehiro/science/sciencelib.html>

「科学図書館」に新しく収録した文献の案内、その他「科学図書館」に関する意見などは、  
「科学図書館掲示板」

<http://6325.teacup.com/munehiroumeda/bbs>